

その2 伝統的平面の継承性

大阪市大生活科学○碓田智子・住田昌二・村上佳子、琉球大教育 鈴木雅夫

<目的>前編で示したように、近年の沖縄の新築戸建住宅の平面タイプは、「LDK型」が主流となりつつあるが、規模の大きな住宅では、続き間を持つタイプが増加することが注目された。本編は、平面と住まい方の対応関係の検討を通じて、今日、沖縄の伝統的な平面形式がどのような層によって継承されているのかを考察するものである。

<方法>前編で検討した、1993年度の建築計画概要書による新築住宅200戸から、約1/10にあたる21戸を無作為に抽出し、1994年11月に、平面採取と、各部屋の使われ方と呼称、起居様式などについてのヒアリング調査を行った。

<結果と考察>21戸の平面タイプは、「LDK型」11戸、「続き間型」4戸、「LDK+続き間型」6戸である。食事や家族の集まり場所はDKやLDKが中心で、全体的にイス座の浸透が窺えた。沖縄の伝統的な平面形式は、一番座、二番座と呼ばれる続き座敷を持ち、一番座に床、二番座に仏壇が配されるものである。この伝統的な型を持つ平面を<伝統型>、それ以外を<非伝統型>とすると、<伝統型>は21戸中8戸であった。敷地面積の平均は、前者が398㎡、後者は308㎡で、90㎡の差がある。延床面積では、前者が181㎡、後者が109㎡で、約70㎡の規模差がみられる。長男の家系6戸中、5戸が<伝統型>であるのに対し、次・三男の家系11戸中、<伝統型>は2戸のみで、6戸が「LDK型」平面であった。沖縄の戸建住宅の平面形式は、全体としては「LDK型」へと移行しつつあるが、その多くは次三男の比較的小規模な住宅によるもので、沖縄の慣習から仏壇を引き継ぐ必要がある長男の住宅においては、伝統的平面形式が継承されていることが示唆される。